

矢野建一学長に聞く

専大は学生を
どう育てるか

専修大学ではどのような教育を行い、4年間で学生をどう育てるのか。着々と進むキャンパス構想も含め、専修大学の今、そして未来に描く教育のビジョンをお尋ねした。

やの けんいち 1949年長野県伊那市生まれ。72年専修大学文学部卒業。80年立教大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。文学修士。92年専修大学文学部助教授。98年教授。文学部長（2006～10年）などを歴任。専攻は日本古代史、日本文化史。近著は、共著『遣唐使の見た中国と日本』（05年、朝日新聞社）、共編著『長安都市文化と日本・朝鮮』（06年、汲古書院）

◆◆ 変わる専修大学 ◆◆

—ここ数年で国際交流会館、神田新5号館、生田第1体育寮・生田第2体育館など次々と新しい施設が完成しました。さらに今年度中には生田キャンパス新2・3号館（仮称）が完成します。専修大学が大きく変わろうとしているように感じますが、いかがでしょう。

専修大学137年の歴史の中でも大きな転換点だと思っています。世界が激動する中、大学としてはそこで活躍できる人材を育てる必要がありますので、改革に踏み切りました。

—キャンパス構想についてお伺いします。

まず神田についてですが、すでに靖国通り沿いに校地を確保しており、そこに専修大学の教育の新しい舞台を作る計画はほぼまとまっております。そこにはグローバル・コミュニケーション学部（仮称）を創設し、これまでの専修大学の教育で比較的手薄と見られていた国際的な部分の強化を図ります。専修大学が掲げる21世紀ビジョン“社会知性の開発”に通じますが、各人の持っている専門領域の知識や技能を糧としながら世界的な課題に答えていけるような人材を育成します。専修大学が創立140周年を迎える2020年、東京オリンピックの年までには達成したいと考えています。

—どのような特長を持つ学部ですか。

学部の核に文学部日本語学科を移設します。外国とコミュニケーションを図るとき、語学力だけ熟達しても不十分で、自国の文化への理解がなければ、深いコミュニケーションは取れません。大学で学ぶコミュニケーション能力とは何なのかを考え、自国の文化に対する正しい理解と異文化との交流を専門的に学べる学科を据えます。

—さらに神田キャンパスに商学部を移設する計画もありますね。

実学の強化を図るためです。専修大学は4人の若者によりつくられました。明治初期にアメリカに留学し、帰国後に法律と経済を日本語で教授する学校をつくりました。彼ら自身は、国の政策づくりのプロフェッショナルであり、その彼らが目指したのは市民レベルから近代日本の礎を築くということでした。こうした専修大学の歴史に立ち返り、実学教育を強化していきたいと考えています。神田新校舎には、その核として商学部を移設します。

—実学という面で見ると、昨年度は公認会計士の合格者数が多かったですね。

公認会計士は21名、そのうち11名が現役で合格しました。専修大学において、資格取得はエクステ

ンションセンターがサポートしています。先ほど、エクステンションセンターの公務員試験講座を受講している学生がERE（経済学検定試験）の大学対抗戦で3回連続優勝したという報告も受けましたが、将来が楽しみです。

——一方、生田キャンパスでも新たな展開がありますね。新2・3号館が今年度中に完成します。

新2号館はアクティブ・ラーニング型の校舎です。神田ではすでに同様のものとして5号館が利用されていますが、これまでの教室のイメージとはずいぶん違い、机と椅子を開放的に配置し、学生が自由に議論し、調べたりしながら学習できる環境です。新3号館は研究拠点として、大学院棟のようなものになります。

——グローバル、実学、アクティブ・ラーニングがキーワードですね。

はい。世界に目を向けるということ、それと創立当時に遡った実学、それから能動的なアクティブ・ラーニングや一昨年度から始まっている新カリキュラム「新たな学士課程教育」といった新しい教育システムの3本柱です。それと生田に日本の大学にはまだないジャーナリズム学科を創設し、新聞に限定しない幅広いメディア関係について学べるようにします。創立140周年に向けての一つの大きな課題と考えていて、それは形を成しつつあります。

◆◆ 批判的な目を身に付ける ◆◆

——親としては我が子が4年間でどう成長するかが最大の関心事ですが、専修大学で学生は何をどのように学ぶのでしょうか。

留学をしたいという学生もいれば、資格を取得したいという学生もいて、普通に就職したいという学生もいます。学生の希望は実に多様です。ですから、そういう様々なニーズに応えられるシステムが必要です。ゼミ、サークル、キャリアデザインセンターやエクステンションセンターでの多様なプログラム、国際交流センターの留学制度など、学生が自分に合った活動を通して成長できるような場が専修大学にはあります。

——矢野学長ご自身も専修大学で学ばれました。学生時代についてお話しいただけますか。

私は中学、高校の教師になろうと思い、長野県から上京して、専修大学の文学部に入学しました。私は歴史を専攻しましたが、当時は文学部といったら、親や親せきからは、お前小説家になるのかなんて聞かれました（笑）。大学の勉強では、同じテキストを読んでも、それぞれ違った捉え方をし、実に多様

な考えがあることに驚かされました。

そこで身に付けたのは、専修大学の学則にもある“何物にもとらわれない批判的な目”だと思います。この「批判的」という言葉の意味するところは、物事を絶えず相対化して見るということです。それこそが大学で学ぶことの意義だと思います。全体がひとつの方向に突っ走るのではなく、待てよと立ち止まって考えてみる。そうしたことは、思ったことを調べて書き、人の前で話してみる作業を通して身に付くもので、それが日常的にできるのが本当の大学教育だと思っています。

——学生と接して、感じることはありますか。

勉強では学生が自分の手足でどこまで調べたのかということを大切に指導してきました。専修大学の学生はしっかりと指導すれば、伸びしろがずいぶんあると感じています。卒業論文の質も高いです。論文を指導するときには、テーマについては他の研究が先行していないところをそれとなく教えますが、そうすると学生も必死で調べてきます。「先生、資料がありませんでした」と言ってくることもあります。「なければやる価値があるでしょう」と（笑）。人が研究していない分野は難しい面もあるけれども、同時に面白さや、やり遂げたときの達成感がある。価値のない資料と見られていたものが生き返ると同時に、それまでの研究で無視されてきた、見過ごされてきたものに接近する。学問というのはそういう意味で果てしない。そういった学問の一端でも、学生時代に触れられたらいいと思います。

◆◆ 育友会との連携が大学に力を ◆◆

——育友会は2018年に創立60年を迎えます。育友会に何を期待しますか。

私立大学として屈指の伝統ある大学ですが、学生たち、教育をめぐる状況は激しく変化をしています。その中で、育友会の存在は大きく、ご父母・保護者との連携が大学にとって重要になっています。

一昨年度から始まった新カリキュラム「新たな学士課程教育」も、きっかけにはご父母の声がありました。たとえば以前、人文科学系のある科目の履修を希望しても、学生が集まりすぎて履修できないということが少なくありませんでした。育友会の支部懇談会でなんとかならないかという声が上がリ、可能な限り改善したいと考えたのも一つの要因になっています。絶えずご父母・保護者との連絡を密にしながら大学運営を進める必要があると思っています。ご子女が社会人になるまで大学と連携しながら、温かいまなざしで見えていただければと思っています。